



8月中旬、科学技術振興を目的にしたタイ高等教育科学研究イノベーション省の「タイ科学技術博覧会2023」が、バンコク郊外の国際展示場で開催された。この博覧会は1984年に当時の科学技術省により「全国科学週間」としてスタートした。以来、官公庁や政府機関、民間企業の協力を得て規模を拡大し、幅広い世代から注目を集めている。

開催初日に会場を訪ねた。カラフルな制服を着た、バンコク近郊の小学生たちが入り口を埋め尽くしていた。入場すると王室のパビリオンが目に入った。展示パネルには、プミポン前国王がさまざまな科学技術を使って農業支援をしてきた功績が披露されていた。水

タイ科学技術博覧会

別会場では、自然、地球、工作技術、生命、エネルギーなどをテーマにした作品展示ブースや、ワークショップに子供たちが集まっていた。中学生は、展示物の前でノートを取っていたが、学校に戻ってから、自分が学んだことを発表するという。

日本パビリオンでは、岐阜県出身で大阪の大学に通う学生が、国際交流のサークル活動としてフェアに参加しており、2025年に開催予定の大阪・関西万博で、世界をつなぐ合奏に使用する「パロトーン」という電子楽器を熱心に

環境問題へ高まる関心

子供たちに教えていた。会場で中高生の作品を見ていたら、一人の学生から声を掛けられた。

「タイ科学技術博覧会2023」の展示ブース「タイ



た。バンコクに住む高校生ジェスさん(18)は友人2人と、学校の協力を得て、食べ残した給食から二酸化炭素の排出量が瞬時に測定できるセンサーを開発したという。

食べ物の廃棄量に対し何本の木を植えなければならぬかを計算する装置である。センサー等の材料費は約1万5千円、製作期間は3週間と聞いた。ここでも環境問題への関心に高さがうかがえた。「将来は医者になることが夢」と目標もはっきりしていた。

タイは50年に「カーボンニュートラル」達成という目標を掲げている。小学校低学年から科学技術に興味を持たせる教育を実践しており、徐々に環境問題への関心を高めていく指導が確立されている。こうした国家イベントを通して、環境問題が早期に解決していくことを期待したい。

(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)